

【栗原が死んだぞ】

1987 年 3 月に 4 年半ぶりにフィリピンから帰国した直後に、東京外国語大で栗原剛君(グリ、9 組)の同期生だった O 君からグリの世界のことを聞かされた。「栗原が死んだぞ」という言葉にただ頭が真っ白になり、今でもその一言しか記憶にない。長いマニラ生活ではあったが、帰国してきてこれからグリとマルに連絡しようと思っていた矢先であった。直ぐにマルこと丸山隆平君(9 組)に連絡したが「亡くなったらしい」と言う。グリのことのどこかに引っ掛かったまま日々の忙しさにかまけて長い間そのままにしていた。

【兄貴・中丸明さん】

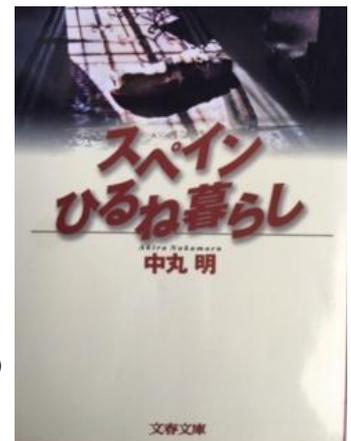
その後、僕は 1992 年から 3 年半ほど米国西海岸に住んだ後に東京に戻って、それからさらに数年後に仙台に行った。仙台に生活した時(1998 年～2000 年の約 2 年間)に、江戸時代初期に仙台藩主・伊達政宗公がメキシコ経由でスペインとローマに派遣した慶長遣欧使節団の歴史書や物語を読み、宮城県内の史跡を歩いたが、中でも出色は「支倉常長異聞―海外に消えた侍たち」(中丸明著、1994 年出版)であった。膨大な史料をもとにスペイン各地に在住する“ハポンさん”を追跡し、支倉常長に同行した使節団メンバーの数奇な運命について書かれた名著である。そして、著者の本名を見て驚いたのである。中丸明(本名:栗原裕)とあるではないか。同志社大学卒、出版社勤務を経て作家。僕の知っているグリ(栗原剛)の兄貴は週刊誌の記者だった。だから中丸明こと栗原裕氏に長い手紙を出した。グリ(栗原剛)の死についてはもう確かめる必要もないほど確信していたものの、兄貴さんの返信によりその早生を正式に(覚悟して)確認したのであった。ここにその手紙の抜粋を紹介したい。

宮原豊様

突然の手紙にびっくりしました。おっしゃるとおり、私が中丸明であり、栗原裕です。剛は末弟で、私とは七つ違いです。昭和 23 年 12 月 3 日の生まれですから、生きていれば 53 歳になりますか、、、弟は 36 歳で昇天しました。私はその前日、スコットランドの取材から帰って来たばかりで、あまりの悲しい知らせに言葉も涙もありませんでした。私は 52 歳で徳間書店を退職し、定年のない生活～つまりは物書きになりました。今春 3 月に如水会館で上田高校同窓会の集まりに引っ張り出され行きました。栗原＝中丸とは知らない同期生(58 期)もいましたが、今では少しは知られるようになり、おかげで母校への著書の寄贈など頼まれました。私は年の半分くらいは、時には 1 年ほどはスペインで暮らしているのですが、このたびは 12 月 3 日に帰国しました。弟が生まれた日ですので…。お送りしました「スペインひるね暮らし」をご笑読ください。剛のことが書いてあります。昔は一家揃って車坂の教会に行ったものです。嫌で嫌でしかたなかったですが、おかげさまで「絵画で読む聖書」がもの凄く売れ、いまでは新潮文庫に入っています。同社の「ハプスブルグ一千年」も来年 7 月には文庫になります。よかったら読んでください。私も来年 4 月に 60 歳の還暦です。といっても、60 なんて働き盛りなのに、リストラされる仲間も多く、あるいは早すぎる訃報が届いたりして大変です。

いずれお目にかかりたく、名刺を同封します。留守電が多いとは思いますが、連絡を取り合い、折を見てお目にかかりたく存じます。

向寒の折、ご自愛ください。 不一 中丸明



【グリからのハガキ】



1967年夏はグリと2人で北アルプス連峰の燕岳・常念岳から槍ヶ岳に登り、鎖梯子を登った槍の頂上で持参したポケット壺のウイスキーで乾杯した。68年7月には、その年4月に京都大学に合格した赤尾晴夫君(9組)、早稲田大学に来たマルと一緒にグリ、宮原の4人で穂高岳登山をしている。涸沢を直登し、北穂のコルの山小屋で泊まり、翌朝 奥穂に登った。ジャンダルムの異形に見入りながら、初登山のマルは足に豆を作って痛々しい姿で下山し、上高地は河童橋で撮ったこの写真はマルからHPに投稿してもらった。前に座っているのがグリ。後列右から、マル、赤尾、宮原。

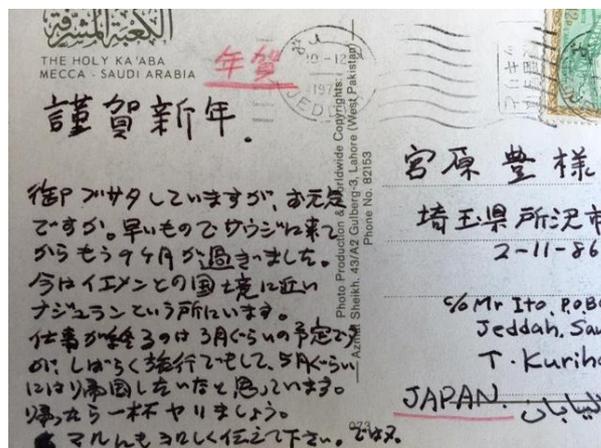
就職してからのハガキは1972年～75年頃のものである。いずれもリヤドやジェッダ(サウジアラビア)、アテネ、バグダッド、カイロ等のアラブ諸国の様子が記されている。グリはその頃 航空写真を撮って地上に戻り、地名を書き込むという砂漠の国の地図作りをしていたが、その砂漠での仕事に疲れると(禁酒国が多いアラブなのに)酒ばかり飲んでいることと、「帰国したら一杯やろう」、そして末尾に「マルにもよろしく伝えて下さい」と必ず記されている。

その後、僕は1977年～1981年までは熊本勤務し、82年～87年はマニラ勤務。82年の初秋の頃か、マニラ出発前にグリとマルと新宿西口で飲みまくったことを覚えている。僕がマニラにいた時期、グリの他界した85年5月までの2年半ほどの彼の生き様が全く見えてこない。マルによれば、中東から帰って東京にいる間、(マルの独身時代には)自由にマルの家に上がりこんでその一室を定宿のようにしていたが、いずれにしても酒ばかり飲んでいてさうだ。どこで何をしていたのか、死因は不明。自死とのうわさも聞いたが確認できないし、今さら知りたいとも思わない。

【赤尾君の記憶】

原町をずっと上って国道18号線にぶつかる手前を右に曲がった奥まったところにあるグリの実家にはよく遊びに行った。琴の師匠をしていたお母さんが教室として使っていた川沿いの離れが、夜にはグリと勉強部屋になった。今 地図で見るとその川は矢出沢川とあるが、その名前は知らなかった。遊びに行った中に誰がいたか、曖昧なところもあるが、飯島泰三君、大塚直久君、赤尾晴夫君、マル、宮原(いずれも9組)がたまに顔を合わせた。

2016年9月 卒後50周年の同期会に参加した赤尾君は12月15日のクラス忘年会に出席した帰り車中でグリとの思い出を話した。「英語だけはよくできたが、他の関心のない科目は見向きもせず、実に自由奔放な奴だった。そして高校の時からよく飲んだね(今では時効)」と語ってくれた。そう言われると僕はグリと勉強のことを話したことはなく、登山やスキーのことばかり話していたと思う。



【再び兄貴・中丸明さん】

「スペインひるね暮らし」から、クリのことを記述した箇所を紹介する。

弟は七つ年下で、三十五で逝った(宮原訂正:実は 36 歳)。東京外国語大学のアラビア語科を出て、砂漠で働いていた。「外語を受けようとおもうんだけど、何語がいいかな」と、進路を相談されたとき、アラビア語をやれ、といったのは僕だった。弟は左利きだった。アラビア語は右から左へ書く。そればかりじゃない。日本は石油が採れない。だから、アラビア語は大切なんだ。英語をやる奴は掃いて捨てるほどいる。「スペイン語なんてのもいいな」と弟は言った。「いいからアラビア語をやれ。そしていつかアルハンブラに行こう」と僕は言った。本当のスペインを知ろうと思ったらアラビア語が出来なくては駄目だ。僕にはその気力がない。あの文字を見ただけで眩暈がしてくる。僕は弟との旅を楽しみにしていたのだ。

【果たせなかった約束。そしてその後…】

僕は 2001 年 12 月ニューデリーに転勤した。4 年近くの歳月を経た 2005 年 9 月末に帰国し、2 年弱は東京勤務、その後 2007 年から 2009 年 3 月末にジェットロを定年退職するまでの約 2 年を横浜で過ごしたにもかかわらず、そう遠くない逗子に住んでいた裕さんにお会いしなかったのはかえすがえすも悔やまれる。裕さんの他界を知らせてくれたのは同期の上原昇君(2 組)だ。言い訳をすれば、このころに小諸市郊外の施設で余生を送っていた父母をほぼ同時に亡くしたことである。僕がインドから帰国するのを待っていたかのように相次いで死期を迎え、2007 年 11 月に母を、4 か月後の 2008 年 3 月末に父を亡くした。その間に埼玉と横浜と小諸と上田を何回も往復した。

全くの偶然ではあったが、塚田道明君(9 組)とマルと一緒に、クリと小林康人君(9 組)の墓参の計画を立てていた。そんなところに栗原裕さんの死亡について知らされた。奥様によると 4 年ほど前に脳梗塞をやり、その後体力の衰えが著しく、2007 年の 12 月 8 日から体調を崩していたが、闘病の甲斐もなく翌 2008 年 1 月 25 日に亡くなられた。

その年の 5 月、若くして他界した同級生 2 人、故・栗原剛君(享年 36 歳)と故・小林康人君(享年 43 歳)の墓参をしたことについては、マルが HP 掲示板(08.5.5)に投稿している。塚田君とマルとともに埼玉は深谷市の栗原家の墓前にてしばし瞑目・黙祷した。ここは数年前「蕨の会」で行った渋沢栄一翁の生地に近い場所だ。

2017 年の元旦。クリよ、それにしても 36 歳は早すぎた。(おまえの分もしっかり生きてやるからな)と弟に誓った兄貴・裕さんは 68 歳で逝去したが、自分もその年齢に達し、あらためて終活のことを考える(いつでも死ねるように、それまではクリの分までしっかり生きてやる)。

さて、この写真は 2016 年 12 月 15 日開催した 9 組忘年会の 2 次会だ。クリよ、みんなただのおじさんになってしまったが、ここに一緒にいてほしかったなあ。誰が誰かわかるかな？マルもふと考えたそう。クリはどんな歌を歌うのだろうか？きっと、オシャレな歌を披露するだろうな、と。

(2017 年 1 月 3 日記)

